

# モークシャーカラグプタの 思想史的位置付け

——言語哲学を手掛かりとして——

石 田 尚 敬

## 0. はじめに

インド仏教の伝統にあって、認識論や論理学といった哲学的議論に積極的に関与した思想家は、ウィーン大学のフラウワルナー博士により、「仏教認識論・論理学派」（以下「仏教論理学派」）と称された。仏教論理学派は、その創始者とされるディグナーガ（陳那、480-540頃）や、大成者とされるダルマキールティ（法称、7世紀頃）をはじめ、多数の思想家を輩出し、著作も数多く残されている。本稿で取り上げるモークシャーカラグプタ（11世紀～12世紀頃）は、同派の最後期の論師として知られ、認識論・論理学の分野では、『タルカバーシャー』（論理の言葉）を残している。『タルカバーシャー』は、綱要書としての色彩が強く、従来、インドで活躍した仏教論理学派の最終的な到達点を要約して示すものと見做されてきた。

仏教論理学派では、知覚や推理などの幅広い論題が扱われているが、言語哲学の分野で提唱された理論が、アポーハ論（排除論）と呼ばれるものである。アポーハ論は、「語は、〈他の排除〉(anyāpoha)を表示する」ないし「語は、〈他の排除〉(anyāpoha)によって自らの意味(svārtha)を表示する」と定式化され、元来、「語の表示対象は何か」を問題とする、〈語の意味〉を問う議論として出発したことが

知られる<sup>1)</sup>。アポーハ論は、ディグナーガによって提唱され、ダルマキールティに至って、分別知 (概念知) の構造を包括的に論じる理論として展開した<sup>2)</sup>。その後、アポーハ論は、各時代に活躍した思想家たちによる多様な解釈を受けつつ、モークシャーカラグプタに至るまで、連綿として受け継がれることとなった。

筆者はかつて、7世紀から8世紀のナーランダール僧院で活躍したシャーキャブッディ (660-720頃) およびシャーンタラクシタ (725-788頃) のアポーハ論を論じ<sup>3)</sup>、8世紀のカシミールで活躍したダルモッタラ (740-800頃) によるアポーハ論の批判的再解釈を経て<sup>4)</sup>、インド仏教後期のジュニャーナシュリーミトラ (980-1040頃)、ラトナキールティ (990-1050頃) 師弟の議論に到るまでの思想史を、〈アポーハの分類〉の観点から整理した<sup>5)</sup>。さらに、モークシャーカラグプタの『タルカバシャー』第3章「他者のための推理」で説かれるアポーハ論については、先行研究を再検討し、特に〈アポーハの分類〉の議論をモークシャーカラグプタの「自説」として読むべきことを提案した<sup>6)</sup>。本稿では、それらを踏まえて、モークシャーカラグプタのアポーハ論の独自性について、特にジュニャーナシュリーミトラ、ラトナキールティ師弟との対比から論じてみたい。そこから、モークシャーカラグプタの思想史的位置付けがより明確になると考える。

また、筆者は、アポーハ論の研究史のなかで度々取り上げられてきた「アポーハ論の三段階発展説」を再考した際、各論師のアポーハ論を分析する際に、以下の2点を明確に区別する必要があることを指摘した<sup>7)</sup>。

**【1】** 否定・肯定の理解のプロセス：肯定的なものを理解した後に否定 (排除) が理解されるのか、あるいは、否定 (排除) が理解されたのちに、肯定的なものが理解されるのか。

**【2】** 表象 (形象) の有無：概念知に現れる表象 (形象) を認めるか否か。

これらの2点については、先行研究では、その区別が明確に意識されておらず、アポーハ論者の議論の識別も曖昧なままとなっていた。モークシャーカラグプタのアポーハ論を考察する場合にも、〈アポーハの分類〉における概念知の形象の議論とともに、肯定的・否定的アポーハ論者の批判に関して「否定・肯定の理解のプロセス」が問題とされることから、これらの点に留意しつつ、考察を進めることとした。

## 1. モークシャーカラグプタの基本的立場

モークシャーカラグプタがアポーハ論を論じる際の基本的立場は、先行研究によって「肯定・否定折衷的アポーハ論」（以下「折衷的アポーハ論」と呼ばれるものに相当する<sup>8)</sup>。そのことは、モークシャーカラグプタの以下の説明から読み取ることができる。

〈排除〉(*apoha*) に限定された〈肯定的なもの〉(*vidhi*) が、意図されている [からである]。

*apohaviśiṣṭo vidhir abhipretah.* (TBh 52,14)

この説明から読み取ることのできる、「語は、〈排除〉(*apoha*) に限定された肯定的なもの (*vidhi*) を表示する」というアポーハ論の解釈は、ジュニャーナシュリーミトラによって提示され、後期仏教論理学派の定説となったものである<sup>9)</sup>。

モークシャーカラグプタは、いわゆるこの折衷的アポーハ論について、詳しく論じることはしていない。しかし、折衷的アポーハ論を説いたジュニャーナシュリーミトラとラトナキールティの師弟が、それまでの仏教論理学派の思想家たちによって論じられたさまざまなアポーハ論解釈の批判的検討の上に自説を論じたことは明らかであり、モークシャーカラグプタもまた、ラトナキールティのテキストを踏襲しつつ、「肯定的アポーハ論」及び「否定的アポーハ論」を批判する論述を提示している。モークシャーカラグプタは、上に引用した言明に引き続いて、以下のように続けている<sup>10)</sup>。

しかし、牛が認識された場合に、「その本質をもつものは、他の本質をもつものではない」というように、間接的に、排除が、後から確定されると考える肯定論者の見解、あるいは、「〈他者の排除〉が認識された場合に、間接的に、他者から排除されたものが確定される」と考える否定排除論者の見解、それ [ら] は妥当でない。[言葉が] 使用される場面に、初めて立ち会った者にも、認識の段階は見られないからである。というのも、いかなる者も、肯定的なものを理解した後に、論理的要請に基づいて、後から排除を理解することはない。あるいは、[いかなる者も、] 排除を理解した後に、後から [他から] 排除されたものを理解することも [ない]。したがって、まさに [肯定的な] 「牛」の認識が、[牛でないものという] 他から排除されたものの認識であると述べられる。

*‘yat tu goprātītau na gavātmāgavātmeti sāmāthyād apohaḥ paścān niścīyata iti vidhivādinām matam, anyāpohapratipattau ca sāmārhād anyāpoḍho gavādir artho ‘vadhāryata iti nivṛtṭyapohavādinām matam, tan na yuktam, vyavahārakāle prathamam vartamānasyāpi pratītikramādarśanāt. na hi vidhiṃ pratipadya kaścīd arthāpattitah paścād apoham avagacchati. apohaṃ vā pratipadya paścād anyāpoḍham avagacchati. tasmād goprātipattir evānyāpoḍhapratipattir ucyate<sup>a</sup>. (TBh 52,14–53,3)*

<sup>a</sup> Ce'e AS<sub>M</sub> 49,13–50,4

以上の説明によって、肯定的アポーハ論者（肯定論者）及び否定的アポーハ論者（否定排除論者）<sup>11)</sup>の見解が否定されるが、これらは、本稿冒頭で述べた、肯定的なものを理解した後に否定（排除）が理解されるのか、あるいは、否定（排除）が理解されたのちに、肯定的なものが理解されるのか、という【1】否定・肯定の理解のプロセスに関わるものである。ここで、モークシャーカラグプタが、肯定的アポーハ論と否定的アポーハ論の双方を否定し、折衷的アポーハ論の立

(4)

場を取っていることが推定できる。

以下では、「肯定的なものが表示された場合に、排除 (*apoha*) はその限定要素として理解される」という見解についての論証が、再びラトナキールティの解説を祖述する形で述べられる。本稿においてモークシャーカラグプタの独自性を考察する前に、次のテキストも確認しておきたい。

たとえ、発声された「牛」という言葉から、「他から排除されたもの」という語が描出されないとされたとしても、そうであっても、限定要素となっている排除 (*apoha*) の認識がないわけではない。「牛」という語は、牛でないもの (非牛) から排除されたものに対して、言語協約がなされているからである。ちょうど、青い蓮に対して言語協約がなされた「インディーヴァラ」という言葉から「蓮」が理解された場合に、その同じ時点で「青」が [認識に] 顕現することが否定されないと同様に、「牛」という語からも、牛でないもの (非牛) から排除された〈もの〉に対して協約がなされているから、牛が認識された場合に、まさに同時に、排除が限定要素であることにより、牛でないものの排除の顕現 [があること] は否定されない。また、ちょうど、直接知覚にとって、純粹否定のあり方をする非存在の把握は、非存在の概念を生じさせる能力に他ならないように、諸々の肯定的な概念にとっても、それに応じた実行 [をもち] 能力こそが、非存在の把握であると述べられる。そのようではなく、もし「牛」という語によって対象を理解した場合に、〈他の排除〉を認識しないならば、その場合、どのようにして、[語を] 理解する者は、他を排除して、牛に向かうのであろうか。それにより、「牛を繫げ」と命じられた者が、馬たちも繫いでしまうことになるだろう。

*yady api gośabdād uccarītād anyāpoḍhaśabdānullekha uktaḥ, tathā 'pi nāpratipattir eva viśeṣaṇabhūtasānyāpohasya. agavāpoḍha eva vastuni gośabdasya saṅketitativāt. yathā nīlotpalasaṅketitendīvaraśabdād*

*utpalapratītau tatkāla eva nīlimasphuraṇam anivāryam, tathā gośabdād apy agavāpoḍha eva vastuni saṅketitād gopratītau tulyakālam eva viśeṣaṇatvād apohasyāḡavāpohasphuraṇam anivāryam. yathā ca pratyakṣasya prasajyapratīṣedharūpābhāvagrahaṇam abhāvavikalpotpādanaśaktir eva, tathā vidhivikalpānām api tadanurūpānuṣṭhānaśaktir evābhāvagrahaṇam abhidhīyate. anyathā yadi gośabdād arthapratipattikāle nāvagataḥ parāpohaḥ, katham tarhy anyaparihāreṇa pratipattā gavi vartatām. tato gāṃ badhāneti codito 'śvān api badhnīyād iti. (TBh 53,3–15)*

<sup>a</sup> Ce'e AS<sub>M</sub> 50,4–51,2

ここでは、肯定的なものが理解された場合に、他のものとの区別を意味する「排除」が、同時に理解されることが論じられている。モークシャーカラグプタが、ジュニャーナシュリーミトラ師弟と同じく折衷的アポーハ論を採用し、その基本的立場としていることは確認できたと思われる。次節では、モークシャーカラグプタの独自性について考察したい。

## 2. モークシャーカラグプタの議論の独自性

前節で確認したように、モークシャーカラグプタは、アポーハ論の基本的な論述を、先行するラトナキールティの説明に依存している。ただし、〈アポーハの分類〉の議論については、ラトナキールティとは異なった論述を提示していることが注目される。以下では、モークシャーカラグプタの〈アポーハの分類〉の議論を扱うが、この箇所は、先行研究によって、すべて「対論者の見解」(前主張)と見做されてきた。このテキストの扱いについては、先行研究の検討を含めて別稿(石田2022参照)で詳しく論じたので、本稿では、その理解に従ってモークシャーカラグプタのテキストを考察することとしたい。

モークシャーカラグプタは、普遍 (*sāmānya*) とその間に成り立つ論理的包括関係(遍充)の議論からアポーハ論を導入したのち、すぐ

さま、「アポーハ論の分類」の議論に入っている。これらは、前節で考察した、肯定的・否定的アポーハ論者の批判 (TBh 52,14-53,3) や限定要素としての排除 (*apoha*) の同時理解の議論 (TBh 53,3-15) に先立つものである。

【問】この「排除」(*apoha*) と呼ばれるものは何か。

【答】思い込み (*adhyavasāya*) に従って、まさに外界の壺などの〈もの〉(*artha*) が、「排除」と述べられる。「他のものがこれから排除される」と [語義解釈] して [そのように理解されるの] である。あるいは、顕現に従って、知の形象 (*buddhyākāra*) が「排除」[と述べられる]。この知の形象において、異類のものが排除される、[すなわち] 区別されると [語義解釈] して [そのように理解されるの] である。あるいは、[排除 (*apoha*) という語義] そのままに (*yathātattvam*)、〈純粹否定〉を性質とした (*prasajyarūpa*)<sup>12</sup> 否定のみが、「排除」[と述べられる]。「排除すること」が「排除」であると [語義解釈] して [そのように理解されるの] である。

【問】思い込みに従って、肯定的なもの [が排除と呼ばれる] ならば、その場合、単に [実在する] 対象 (*viṣaya*) [が述べられている] ということになる。

【答】そうではない。排除に限定された〈肯定的なもの〉が、意図されている [からである]。」

*nanu ko 'yam apoho nāma. yathādhyavasāyaṃ<sup>1</sup> bāhya eva ghaṭādir artho 'poha ity abhidhīyate, apohyate 'smād anyad vijātīyam iti kṛtvā. yathāpratibhāsaṃ buddhyākāro vāpohaḥ, apohyate pṛthak kriyate 'smin buddhyākāre vijātīyam iti kṛtvā. yathātattvaṃ nirvrtti-mātraṃ prasajyarūpo vāpohaḥ, apohanam apoha iti kṛtvā. nanu yathādhyavasāyaṃ vidhir eva, tarhi kevalo viṣaya ity āgatam. na. apohaviśiṣṭo vidhir abhipretaḥ. (TBh 52,7-14)*

<sup>1</sup> °*ādhyavasāyaṃ* em. (cf. TBh 52,13) : °*ādhyavasāyaṃ* TBh

最後のモークシャーカラグプタの返答は、前節で引用した箇所である。ここでは、「他の排除」(*anyāpoha*) という語の語義解釈を通して、(1)外界の対象、(2)知の形象、(3)純粋な否定のみという3項目が提示される。

- (1) 外界対象：思い込み (*adhyavasāya*) に基づく対象
- (2) 知の顕現：顕現 (*pratibhāsa*) に基づく対象
- (3) 否定のみ：語義そのまま (*yathāttva*) の、〈純粋否定〉を特質とした (*prasajyarūpa*) 〈否定のみ〉

なお、モークシャーカラグプタの上記の議論は、先行研究では、一貫して対論者(前主張)として扱われてきた(石田2022参照)。そのことは、ジュニャーナシュリーミトラ、ラトナキールティの議論を参照することにより理解できるものである。本稿においてもラトナキールティのテキストを参照したい。

【問】この「排除」(*apoha*) と呼ばれるものは何か。「これが他のものから排除される」、「これから他のものが排除される」、「ここにおいて他のものが排除される」という語義解釈によって、異類から排除された外界対象が意図されるのか。あるいは、知の形象が意図されるのか。あるいは、「排除すること」が「排除」であるから、「他の排除のみ」という、3つの立場がある。まず、最初の二つの立場はあり得ない。「排除」(*apoha*) という名によって、外ならぬ肯定的なものが意図されているからである。最後の立場もあり得ない。通念(=経験)によって否定されるからである。

*ko 'yam apoho nāma. kim idam anyasmād apohyate, asmād vānyad apohyate, asmin vānyad apohyata iti vyutpattyā vijātivāyṛtām bāhyam eva vivakṣitam, buddhyākāro vā, yadi vāpohanam apoha ity anyavyāyṛttimātram iti trayah pakṣāḥ. na tāvad ādimau pakṣau, apohanāmnā vidher eva vivakṣitatvāt. antimo 'py asaṅgataḥ, pratītibā-dhitatvāt.* (AS<sub>M</sub> 47,4–9)

ここでは、「他の排除」(*anyāpoha*) の語の語義解釈とともに、(1)外界

対象、(2)知の形象、(3)他の排除のみという3つの立場が挙げられた上で、明確に3つの立場が否定されている。ラトナキールティの議論は、ジュニャーナシュリーミトラの議論を受けたものであるが、師弟は、以上のようなアポーハの語義解釈を通した3つの立場をすべて否定したうえで、「語は、排除 (*apoha*) に限定された対象を表示する」という独自の学説に到達したことが知られる<sup>13)</sup>。本稿では、ジュニャーナシュリーミトラの議論も参照しておきたい。

さらに、「これは他のものから排除される」あるいは「ここにおいて他のものが排除される」[といった語義解釈]か、異類から排除された外界対象 (=個別相)、[あるいは] 知の形象が〈他の排除〉(*anyāpoha*) として主張されるが、それには何の益もない。「排除」(*apoha*) という名によって、肯定的なものが意図されているからである。そもそも、[肯定的なものに、「排除」という] 別の名を付けてみても、〈もの〉(*vastu*) それ自身の性質が変わることはない。

*yat punar anyasmād apohyate, apohyate 'nyad asmin veti vijātivyāvṛtṭam bāhyam eva buddhyākāro 'nyāpoha iti gīyate. tena na kaścīd upayogaḥ, apohanāmnā vidher eva vivakṣitatvāt, na ca nāmāntarakaraṇe vastunaḥ svarūpaparāvṛtṭiḥ.* (AP<sub>J</sub> 100,23–26)

ジュニャーナシュリーミトラが、「別の名を付けてみても、〈もの〉それ自身の性質が変わることはない」とまで述べている以上、〈概念知の顕現〉や〈外界対象〉に「他の排除」(*anyāpoha*) という名称を与えることは、思想史上、完全に否定されたように思われる。ラトナキールティは、忠実に師であるジュニャーナシュリーミトラに従っている。

しかし、モークシャーカラグプタは、敢えて〈アポーハの3分類〉を取り上げ、「思い込みに従って」(*yathādhyavasāyam*) などの説明を加えた上で、解説を行っているのである。もし、ジュニャーナシュリーミトラ師弟と同様に〈アポーハの3分類〉の否定するのであれ

ば、肯定的・否定的アポーハ論者の否定と同じく、ラトナキールティのテキストをそのまま再利用すればよかつたはずである。ここに、モークシャーカラグプタの独自性を見出すことは、不可能ではないだろう。

それでは、モークシャーカラグプタがなぜ〈他の排除の3分類〉を提示したかを推察すると、それは、過去にナーランダール僧院で活躍したシャーキャブッディやシャーントラクシタの議論があったことを考慮することにより説明できる。シャーキャブッディの議論を参照しよう。

ここにおいて、以下のことが意味されている。すなわち、〈他の排除〉(*anyāpoha*)は3種である。まず、第1の〔他の排除〕は、排除された個別相(*svalakṣaṇa*)に他ならない。「他のものがここにおいて排除される」と〔語義解釈(*vyutpatti*)〕して〔そのように理解されるの〕である。それに関して〔師ダルマキールティによって〕述べられている――

「[すべての存在(*bhāva*)は、] 自己の本質をもつもの(=同類)及び他の本質をもつもの(=異類)からの排除を有している。」(『知識論評釈』第1章第40偈cd)

と。そして、この〔〈他の排除〉(=排除された個別相)〕は、語と証因に依拠する行為(*vyavahāra*)の拠り所として設定されたのであり、語の表示対象として〔設定されたの〕ではない。第2の〔〈他の排除〉は〕、〔純粋な〕〈他の排除〉のみ(*anyavyavacchedamātra*)である。「〈他の排除〉とは、他を排除すること(*anyāpohana*)である」と〔語義解釈〕して〔そのように理解されるの〕である。それは、すべてのものに対して無区別なものとして、先の論師たち(*pūrvācārya*)によって設定されたものである。単なる否定はすべてのものに対して区別がないからである。第3の〔〈他の排除〉〕は、概念知の顕現(*vikalpa buddhipratibhāsa*)である。「これによって他のものが排



ここで、モークシャーカラグプタが、第3項目である「排除 (*apoha*) という語義そのままの意味での〈否定のみ〉」について、「純粹否定を特質とした」(*prasajyarūpa*) と述べていたことは、注目に値する。

では、アポーハの3分類と肯定・否定折衷のアポーハ論は共存できるのであろうか。『タルカバーシャー』のテキストでは、以下の応答だけが手掛かりとなる。

【問】 思い込みに従って、肯定的なもの [が排除と呼ばれる] ならば、その場合、単に [実在する] 対象 (*viṣaya*) [が述べられている] ということになる。

【答】 そうではない。排除 (*apoha*) に限定された〈肯定的なもの〉が、意図されている [からである]。

*nanu yathādhyavasāyaṃ vidhir eva, tarhi kevalo viṣaya ity āgatam. na, apohaviśiṣṭo vidhir abhipretah.* (TBh 52,12-14)

ここで、対論者ないし想定反論は、外界対象である個別相のみを問題としているが<sup>15)</sup>、そこにおいて、「肯定的なもの (*vidhi*) こそが意図されるならば、単に〈対象〉 (*viṣaya*) が述べられているだけになる」と指摘されていることは重要である。それに対し、モークシャーカラグプタは、「排除 (アポーハ) に限定された肯定的なものが意図されているならば、単なる〈対象〉 (*viṣaya*) にはならない」と返答している。モークシャーカラグプタのこの理解により、排除 (*apoha*) に限定された概念知の顕現や外界対象 (個別相) は、実在論学派が語の意味とするような〈肯定的なもの〉と差別化されることとなったと考えられる。ここにおいて、〈他の排除〉の3分類と、折衷のアポーハ論の両立が図られたことになり、このことは、思想史上も有意義なものである。

### 3. モークシャーカラグプタのアポーハ論の意義

ではここで、モークシャーカラグプタがアポーハの分類の議論を自説として提示した意義について、触れておきたい。

モークシャーカラグプタは、「アポーハに限定された肯定的なものが表示対象となる」という、いわゆる折衷的アポーハ論を説くが、折衷的アポーハ論を説いたジュニャーナシュリーミトラが提示し、弟子のラトナキールティによっても、そのアポーハ論の要約として提示された詩節は、以下のものである。

諸々の語によって、まず、対象が語られる。その場合、排除 (*apoha*) は、その属性 (*guṇa*) として理解される。一方の対象 (= 個別相) は断定 (= 思い込み *adhyāsa*) [という働き] に基づいて、他方 [の対象] は、顕現に基づいて設定される。[しかし、] 真実においては、[語の] 表示対象はいかなるものも存在しない。  
*śabdais tāvan mukhyam ākhyāyate 'rthas tatrāpohas tadguṇatvena gamyah /*

*arthaś caiko 'dhyāsato bhāsato 'nyah sthāpyo vācyas tattvato naiva kaścit //* (AP<sub>J</sub> 101,2-5; AS<sub>M</sub> 70,6-9)

ここでは、経験世界 (世俗) と真実の世界 (勝義) を論じる二諦説が導入され、経験世界の議論として、顕現に基づく対象と、「対象である」という断定 (= 思い込み) に基づく外界対象 (個別相) という2種の対象が設定される。そして、排除 (*apoha*) は、2種の対象の属性 (*guṇa*) として理解されると述べられている。さらに、真実としては、語の対象は何も存在しないという見解が表明されている。ここでは、経験世界の議論として、3項目が確かに述べられている。

- ① 断定 (= 思い込み *adhyāsa*) に基づく対象：外界対象
- ② 顕現 (*bhāsa*) に基づく対象：概念知の顕現
- ③ 排除 (*apoha*)

しかしながら、アポーハ論においては、創始者であるディグナーガ以来、「語は排除 (*apoha*) を表示する (意味する)」という言明と、「語は、排除に限定された対象 (*artha*) を表示する」という言明が併存してきたことが問題であった<sup>16)</sup>。実際、ラトナキールティは、「排除 (*apoha*) が語の意味であることが示される」(*apohaḥ śabdārtho*

*nirucyate* AS<sub>M</sub> 47,3) と述べて著作を開始しており、ジュニャーナシュリーミトラは、有名な以下の詩節により、自らのアポーハ論を開始している。

「排除 (*apoha*) が、語と論証因によって明らかにされる」という定説が論証される。すべての存在が言語表現されないことを論証するために。」

*apohaḥ śabdalingābhyāṃ prakāśyata iti sthitiḥ /*

*sādhyaḥ sarvadharmāṇām avācyatvaprasiddhaye // (AP) 99,1-2*

ここでは、すべての存在が言語表現されないという究極的真実 (勝義) にも言及されているが、日常経験のレベルでは、「語は、排除 (*apoha*) を表示する」というのが、仏教論理学の創始者ディグナーガ以来の説明であった。先に見た、「語が対象と表示する際、排除 (*apoha*) はその属性として理解される」というジュニャーナシュリーミトラの説明では、あくまでも排除 (*apoha*) は、対象を規定する限定要素にとどまっていることがわかる。

さて今、モークシャーカラグプタは、ジュニャーナシュリーミトラ師弟によって否定されたアポーハ論の3分類を復活させることで、以下のような解釈を可能にしたと考えられる。

- (1) 第1のアポーハ…外界対象：思い込み (*adhyavasāya*) に基づく対象
- (2) 第2のアポーハ…知の顕現：顕現 (*pratibhāsa*) に基づく対象
- (3) 第3のアポーハ…否定のみ：語義そのまま (*yathātattva*) の、  
〈純粹否定〉を特質とした (*prasajyarūpa*)  
〈否定のみ〉

第1、第2のアポーハは、それぞれ、外界対象及び知の顕現であり、これは、ジュニャーナシュリーミトラ師弟の提示する、2種の対象 (*artha*) に相当する。モークシャーカラグプタのように、語義分析によって第1項目や第2項目を「アポーハ」と呼ぶ理由を提示することは、表示対象となる2種の対象を、「アポーハ」と呼ぶことを承

認するものであった。このように解釈することで、「語の対象は排除 (*apoha*)」であるという定説を擁護したと考えられるのではないだろうか。

ここで、本稿冒頭で触れた、「概念知に現れる表象 (形象) を認めるか否か」という、【2】表象 (形象) の有無を問題とするならば、モークシャーカラグプタは明らかに概念知の形象を語の意味として認めていることがわかる。

モークシャーカラグプタの展開した議論は、アポーハの分類の議論を否定理解のプロセスに関わる肯定論者・否定論者の見解とともに否定し、後期仏教論理学派の意味論を完成させる必要のあったジュニャーナシュリーミトラ師弟には、不可能なものであった。その意味で、インド仏教最後期に登場し、『タルカバーシャー』を著したモークシャーカラグプタが、最終的にアポーハ論を集大成したと評価することができよう<sup>17)</sup>。

#### 4. 存在命題についての議論

本節では、モークシャーカラグプタがアポーハ論に関連させて論じている、存在命題についての議論について触れておきたい<sup>18)</sup>。モークシャーカラグプタは、他の排除 (*anyāpoha*) の語義分析を用いて3種の項目を提示したが、思い込み (*adhyavasāya*) に基づく対象である「外界対象」と顕現 (*pratibhāsa*) に基づく対象である「知の顕現」の違いについては、詳しく論じていない。そのため、外界対象である個別相が直接的に語の表示対象となることはない論じることで、結果的に、知の顕現が、直接的な語の表示対象とされているのである。

個別相が直接的に語の表示対象となることはない論じるにあたって採用されたのが、「ある」または「ない」という存在命題に関わる議論であった。この議論についても、モークシャーカラグプタはラトナキールティの議論を祖述している。以下に参照しておこう。

さらにまた、個別相を本質とした実在が表示対象であったなら

ば、[その対象は] 全面的に理解されるから、肯定および否定は、結びつかない。というのも、それが存在していれば、「ある」と述べることは無意味となり、「存在しない」と述べることは、正しくないことになるからである。一方、[その対象] が存在しないならば、「存在しない」と述べることが無意味となり、「存在する」と述べることは不正となる。しかし、「存在する (在る)」という語の適用は、実際に存在する。したがって、究極的真実としては、個別相は諸々の語によって、表示されるものではないということが、論証される。

*<sup>a</sup>kiṃ ca svalakṣaṇātmani vastuni vācye sarvātmanā pratipatteḥ vidhiniṣedhayor ayogaḥ. tasya hi sadbhāve astīti vyartham. nāstīty asamartham. asadbhāve tu nāstīti vyartham, astīty asamartham. asti cāstyādīpadaprayogaḥ<sup>a</sup>. tasmāt paramārthato na svalakṣaṇaṃ śabdair abhidhīyata iti sthitam.* (TBh 54,3–7)

<sup>a</sup> Ce'e AS<sub>M</sub> 55,8–11

存在命題の議論は、文法学者バルトリハリ（5世紀頃）に遡り、ダルマキールティによって仏教論理学派の議論に取り入れられた。その後、ダルモッタラの特異な解釈を経て、ジュニャーナシュリーミトラ師弟によって、再びアポーハ論の論述中に取り入れられたものである<sup>19)</sup>。モークシャーカラグプタは、基本的にはジュニャーナシュリーミトラ師弟の提示したアポーハ論の枠組みを採用しており、上記の議論もそのまま採用することとなった。ただし、綱要書としての色彩が強い『タルカパーシャー』において、ここまでアポーハ論の骨格が余すところなく示されていることは、驚きにも値する。

## 5. おわりに

本稿では、モークシャーカラグプタのアポーハ論について、かつてシャーキャブッディやシャーンタラクシタが論じた〈アポーハの分類〉の議論を改めて取り上げ、〈アポーハの3分類〉と「語は、排除

(*apoha*) に限定された肯定的なものを表示する」という後期仏教論理学派の定説とを統合し、両立させていることを明らかにした。そこに、ジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティの議論を受け、さらにアポーハ論の体系化に一石を投じた、モークシャーカラグプタの思想史上の position を示すことができたと思う。

先行研究では、モークシャーカラグプタのアポーハ論は、ジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティの議論の延長性で理解されるほかはなく、それは研究の進展からしても、致し方ないものであった<sup>20)</sup>。しかしながら、シャーキャブッディやシャーンタラクシタといった仏教論理学派の思想家の説いたアポーハ論についての研究の進展を踏まえることによって、インド仏教の最後期に活躍したモークシャーカラグプタの議論の意味を、再度見直すことができたといえよう。

## 註

- 1) Cf. Frauwallner 1937: 278–279.
- 2) ダルマキールティの最初期の著作、『知識論評釈』(*Pramāṇavārttika*) 第1章でも、言葉(語)と同時に認識(知)が議論される。Cf. e.g. PV 1.51: *anyathaikena śabdena vyāpta ekatra vastuni / buddhyā vā nānyaviśaya iti paryāyatā bhavet*. 「そうでなければ、ひとつの語あるいは知によって包摂(=理解)されたひとつの實在に、[包摂されない]他の領域はないから、[すべての語や知は]同義ということになってしまうだろう。」
- 3) Cf. Ishida 2011 (石田2005)。
- 4) 石田2014及び石田2016参照。
- 5) 石田2021a参照。
- 6) 石田2022参照。
- 7) 石田2020及び石田2021c参照。
- 8) 岡田2010: 91参照。桂1988は「折衷主義的アポーハ論」、長崎1984は「否定肯定的アポーハ論」と称している。詳しい説明は、長崎1984: 347–353参照。
- 9) Katsura 1986及び桂1988参照。
- 10) モークシャーカラグプタの肯定的・否定的アポーハ論者の批判は、梶山雄一博士の研究(Kajiyama 1966, 梶山1967)のほか、岡田2010: 91によつ

- でも触れられている。
- 11) ラトナキールティは「否定論者」(*pratiśedhavādin*)と述べていることに注意しておきたい。
  - 12) この箇所で使用される *prasajyārūpa* とは、*prasajyapraśedharūpa* の省略である。中間を省略した複合語 (*madhyalopa*) として理解できよう。
  - 13) 石田2021a: 9参照。
  - 14) Cf. Ishida 2011: 197–199 (石田2005: 87–90)。
  - 15) ここで対論者ない想定反論が外界対象しか扱っていないことの理由については、石田2022参照。
  - 16) Pind 2015: xxxiii (§3.11) 参照。ディグナーガは、「語は他のものの否定に限定された〈もの〉(*bhāva*)を表示する」と述べている。Cf. PSV 5 45,2–3: *śabdo 'rthāntaraviśiṣṭān eva bhāvān āha*.
  - 17) ただし、モークシャーカラグプタは、本稿で引用したジュニャーナシュリーミトラの詩節は引用しておらず、「真実においてあらゆるもの(一切法)は語によって表示されない」という、究極的真実の立場に触れることはない。これに関し、桂1988は、ラトナキールティは、師であるジュニャーナシュリーミトラに比べ、日常経験レベルの議論に重きを置いていると指摘しており、モークシャーカラグプタの立場は、ラトナキールティに近いと見做すことも可能である。ただし、ラトナキールティも、ジュニャーナシュリーミトラの詩節を引用(再利用)しつつ、「真実においていかなる表示対象も存在しない」(*vācyas tattvato naiva kaścit* AS<sub>M</sub> 70,8–9)と述べてはいることには注意しておきたい。
  - 18) 存在命題の議論は、赤松1979に論じられているほか、ジュニャーナシュリーミトラの議論については、小川1981に詳しい解説がある。
  - 19) 石田2021b 参照。
  - 20) 梶山1958においても、アポーハの3分類及び肯定論者 (*vidhivādin*)・否定論者 (*nivṛtīvādin*) の問題が扱われるが、これらの立場の扱いについて、「その点 Mokṣākara の文章は明確でない」と評されている。

#### Sigla for minor witnesses

Ce'e *citatum ex alio usus secundarii modo edendi* / citation from another (text) being used secondarily with redactional changes.

#### 略号

AP<sub>J</sub> Apohaprakaraṇa (Jñānaśrīmitra): see McCrea/Patil 2010, 99–128.  
 AS<sub>M</sub> Apohasiddhi (Ratnakīrti): see McAllister 2020, 47–82.

- TBh Tarkabhāṣā (Makṣākaragupta): H. R. Rangaswami Iyengar (ed.), *Tarkabhāṣā and Vādashāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda*, Mysore 1952.
- PV1 Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), chapter 1: see PVSV.
- PVSV Pramāṇavārttikasavṛtti (Dharmakīrti): R. Gnoli (ed.), *The Pramāṇavārttikasavṛtti of Dharmakīrti*, Roma, 1960.
- PSV 5 Pramāṇasamuccayasavṛtti (Dignāga), chapter 5: see Pind 2015, 1-63.

### 参考文献

- 赤松1979 赤松明彦「Dharmakīrti 以後の Apoha 論の展開— Dharmottara の場合—」『印度学仏教学研究』28/1, 1979, 43-45(L).
- 石田2014 石田尚敬「ダルモータラによる分別知の考察」『印度学仏教学研究』62/2, 2014, 77-81(L).
- 石田2016 石田尚敬「仏教論理学派における分別知の考察— シェンタラクシタとダルモータラの比較から—」『仏教学』第57巻, 2016, 19-36.
- 石田2020 石田尚敬「アポーハ論の三段間発展説再考」『印度学仏教学研究』68/2, 2020, 154-160.
- 石田2021a 石田尚敬「ダルマキールティ以降の言語哲学の展開— 〈他の排除〉の分類を手掛かりとして—」『愛知学院大学文学部紀要』50, 2021, 1-10.
- 石田2021b 石田尚敬「〈知の形象〉は語の意味か— ダルモータラの考察を手掛かりとして—」『禅研究所紀要』49, 2021, 1-17.
- 石田2021c 石田尚敬「シャーキャブッディのアポーハ論の思想史的 position」『印度学仏教学研究』69/2, 2021, 138-144.
- 石田2022 石田尚敬「モークシャーカラグプタの言語哲学」『東海佛教』72, 2022.
- 岡田2010 岡田憲尚「間接的に知られる〈他者の排除〉について」『仏教学』第52号, 2010, 91-111.
- 小川1981 小川英世「ジュニャーナシュリーミトラの概念論」『哲学』33, 1981, 67-80.
- 梶山1958 梶山雄一「Mokṣākaragupta の論理学」『印度学仏教学研究』6/1, 1958, 73-83 (梶山2013: 323-450に再録).
- 梶山1967 梶山雄一「認識と論理 (タルカパーシャー)」『世界の名著 2 大乘仏典』中央公論社, 1967, 447-543 (梶山2013:

- 307-322に再録).
- 梶山2013 梶山雄一『梶山雄一著作集第7巻 認識論と論理学』春秋社, 2013.
- 桂1988 桂紹隆「ジュニャーナシュリーミトラのアポーハ論」『仏教学セミナー』通号48, 1988, 69-81.
- 長崎1984 長崎法潤「概念と命題」『講座大乘仏教第9巻 認識論と論理学』春秋社, 1984, 341-368.
- Frauwallner 1937 Erich Frauwallner, Beiträge zur Apohalehre. II. Dharmottara. *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 33, 1937, 233-287.
- Ishida 2011 Hisataka Ishida, On the classification of *anyāpoha*. *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis*. Ed. Helmut Krasser. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2011, 193-206 (石田2005「〈他の排除 (anyāpoha)〉の分類について— Śākyabuddhi と Śāntarakṣita による〈他の排除〉の3分類」『インド学仏教学研究』12, 2005, 86-100).
- Kajiyama 1966 Kajiyama Yuichi, “Introduction to Buddhist Philosophy,” *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*, 10, 1966, 1-173.
- Katsura 1986 Shoryu Katsura, “Jñānaśrīmitra on apoha.” *Buddhist Logic and Epistemology, Study in the Buddhist Analysis of Inference and Language*, 1986, 171-183.
- McAllister 2020 Patrick McAllister. *Ratnakīrti's Proof of Exclusion*, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2020.
- McCrea/Patil 2010 Lawrence J. McCrea/Parimal G. Patil. *Buddhist Philosophy of Language in India*, New York: Columbia University Press, 2010.
- Pind 2015 Ole Holten Pind. *Dignaga's Philosophy of Language: Pramāṇasamuccayavṛtti V on anyāpoha*, Part 1, Wien: Beitrage Zur Kultur-Und Geistesgeschichte Asiens, 2015.

(令和3年度科学研究費補助金(若手研究・課題番号18K12203)による研究成果の一部)